

思いつくまま

尾形敏彦

いかにすれば無力な私が純粹にものを味わえるか。これが私の年来の課題である。なぜ、人は歓楽の極みで泣き、あるいは、泣くことに快感を感じるのか。大王アレキサンダーは敵撃滅のたびにどのような快楽に酔ったことか。世人の期待に背かないように歴史家は劇的な話題に注目し、夢追い酒の静かな幸福をあまり伝えようとはしなかった。酔生夢死とは無意味な生涯を送ることだという解釈が普通だが、幸運にも私は中国でこの意味深い言葉の一端にふれたような気がする。中国といえば、感動したことがあまりにも多すぎる。たとえば、臥竜崗と許昌の間であつたかと思うが、青空に浮かぶ白雲が天山の蜃気楼だと教えられた時にはひどく感動した。さわるな、それが思い出だ。嬉しいことに、私の思い出の多くはバラの花だ。……ところで、プラトンの『ゴルギアス』には、幸福は健康、美貌、財産の順に並べられると書いてある。美

貌が第二位とは意外に思えたが、娼婦フリーネーは輝くばかりの美しさによって裁判官の目を奪い勝訴したそうである。文学がわからなくてもプラトンはさすがに目が高い。感情の前では理性などものの数ではないようだ。

戦争ともなれば言うまでもなく、恋に燃える時でも、人は理性を失い、言葉を忘れ、耳も聞こえず、目も見えず、気絶さえもする。歓喜や落胆の不意打によってその場で息絶えたという話もある。ジュースなしで堅い肉だけを食べさせられていた帝王ガルバには狂気も残酷もなく安定だけがあつたことだろう。ともあれ、無常迅速、一寸先は闇である。老化とは知らない間に進む不治の病らしい。現代は自然科学だけが急進している情報化時代であつても、当然のことながら人間の生物学的変化はまったく見られない。

こうなると、不老不死の妙薬とは夢のスタイラスだと思いたい。こんな暑い日にはクルサロンで懷疑派の祖ピュロンの豚の話を聞くほうがましである。ソクラテスは老いて血のめぐりが悪くなると明晰さが曇るのを恐れて義務を怠り、デモクリトスは記憶力の衰えに気づくと進んで死神に頭をさげたそうである。易や魔術や奇蹟や幻覚などに頼るのも錯

覚利用の老化対策としては有効かもしれない。しかし、志に殉じる信念は生命よりも強いから信仰にしくはないと感じ、私は復員直後に入道して、我を捨てた心身一如の修業三昧の二年を過ごした。その時にひかれた文句は「行々として円寂に到り、去々とし源初に入る。三界は客舎の如し。一心はこれ本居なり。」であつた。

同時に、絶え間なく精進努力を続けている間だけが仏の境地だと痛感した。近頃では、法輪を転ずる時には三毒離脱を求めず万善具足を唱えている。老いたのかもしれない。目を転じて『伝道の書』を見ると「千人のうちに善人は一人もない」とか「知識を得る者は苦痛を得る」とかひとひねりした面白さをもつ言葉が目につく。目から鱗が落ちるのを期待して哲学の門を叩きもしたが、たえられなくなつたら死ねという処方方をもらつて、哲学は現実と無関係だと思つた。この現実とはなにか。ここから本題が始まるようである。私がギリシアにひかれるのは、二十年以上も前に師事した故アレン・テイト教授の「アリストテレスの詩学」が私の心に影を落としていくからだと思う。(六〇・七・一)

(おがた としひこ 文学部教授)